

ポンカンの栽培と施肥

鹿児島県果樹試験場

土 持 武 男

1. ポンカン栽培の現況

鹿児島県でのポンカン栽培は、年平均気温18°C以上、極温が-3°C以下に下らないことが条件とされるため、薩摩、大隅の両半島の沿岸地帯と、屋久島、大島等の離島に栽培されている。面積は約2,000haでこのうち、結果樹令に達した園が約1,000ha、生産量は約7,000トンに達している。

ミカンの生産量の増加、外国産果実の輸入自由化、特に台湾ポンカンの輸入による価格の下落が心配される昨今であるが、昨年のミカン価格の暴落にもかかわらず、ポンカン価格への影響はあまりなく、生産者は、ポンカン栽培に望みをつなぐ結果となった。

温州ミカンの前途が困難視され、他の品種、樹種への転換、更新が話題になってきたが、鹿児島県では、前記の気象条件の地帯のカンキツは、ほとんどポンカンであるため、温州ミカンからポンカンへの転換によって、面積が増える可能性はあまりないが、規模拡大の必要性からの面積増加の可能性は残されている。生産量は、年々成園率が高まるにつれて増加するのは必然である。

2. ポンカン栽培の問題点

ポンカンは、温州ミカンに比べ単価が高く収量が少なく、安定しないことが大きな問題点である

これは、ポンカンの木が直立性で、枝の発生角度がせまく、栄養生長に走りがちな特性があることや、台風等の気象災害や病虫害に弱いこと、働力不足による管理不足等、いろいろの原因が考えられるが、ミカンに比べて、栄養のバランスを適正に保つことが大きな原因と考えられる。

これの対策として、主枝の誘引開張(ナシ栽培で行われているように、枝をまげて開かせ、木を低くする方法)の技術が取り入れられ、少しずつ効果をあげているが、この技術も、確立された技術とまでは行っていない現状である。

ポンカン栽培の問題点は、果実内容の品質にも問題点が残されているものの、まず、いかにして

収量の安定化をはかるかという点にある。

3. ポンカンの品質

ポンカンは、ミカンに比較して糖度が高く、クエン酸は少なく、独特の芳香風味と甘味が特徴の果実である。

第1表 台湾産、鹿児島産ポンカンの品質 (鹿児島県試)

項目 年度	産地名	一果 平均重	果汁 割合	可溶性 固形物	クエン 酸
45年度	台湾産	124 g	72.3%	11.5%	0.38%
	垂水産	111	71.4	11.6	0.93
	屋久島産	111	—	11.9	0.95
46年度	台湾産	154	—	11.0	0.55
	垂水産	180	—	12.6	0.96
	屋久島産	177	—	13.0	0.85
47年度	台湾産	178	77.2	11.5	0.47
	垂水産	173	73.8	12.4	0.72
	屋久島産	186	71.2	12.8	0.68

第1表は、台湾からの輸入物と鹿児島県産ポンカンとの、果実特性の比較をした結果である。鹿児島産ポンカンが糖、酸ともに高く、味は濃厚である。一方、台湾産ポンカンは酸が少な過ぎる感じであるが、鹿児島産ポンカンは果汁割合が低い傾向にあり、この点が今後の品質向上面での問題となろう。

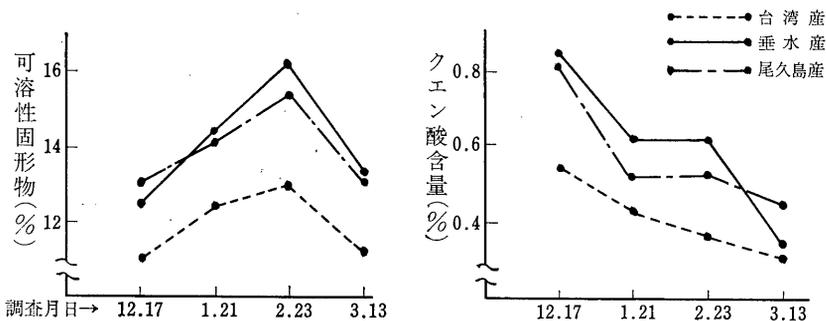
第1図はポンカン貯蔵中の糖、酸の変化であるが、12月収穫のものを後熟させて、糖度で14~15度、クエン酸が0.6程度になる2月が、鹿児島産ポンカンの特性を最もよく現わす食べ頃であるといえそうである。

もっとも、貯蔵方法が十分であれば、3月、4

< 目 次 >

※ 農家の移つりかわり	(2)
全農連技術顧問 黒川 計	
※ ポンカンの栽培と施肥	(3)
鹿児島県果樹試験場 土持武男	
※ 茶園の土壌診断と施肥効果	(5)
鈴鹿市農業協同組合 谷沢義一	
※ モモとCDU化成	(7)
〜とくに肥大と品質に及ぼす影響〜	
岡山県立農業試験場 岩田信一	
※ 水稻のいもち病と新農薬	(10)
農業技術研究所 上杉康彦	
※ かんきつの多目的スプリンクラー事業	(12)
かんきつ生産の合理化について	
※ 短根にんじんの栽培とCDU化成の肥効	(15)
千葉県山武農業改良普及所松尾支所 深山 和	

第1図 台湾産、鹿児島産ポンカンの糖、酸の経時的变化 (鹿児島県果試)



カリ18kgとなっており、土壌の種類によって施肥量は加減することになっている。

5. ポンカンの施肥時期と割合

施肥回数には年3回が大部分であるが、砂レキ質土壌では、春、秋を2回に分施し、夏肥

と合せて年5回施肥の例もある。

チッ素の施肥時期別割合は、春肥と秋肥は各々4割、夏肥は2割が基準となっているが、土壌が肥沃な園や、一部年内出荷をする地帯では、夏肥を施用しない園が増加しつつある。

第3表 ポンカンの時期別施肥割合

時期 成分	春 肥 (2月下旬)	夏 肥 (5月下旬)	秋 肥 (12月下旬)
N	40%	20%	40%
P	50	20	30
K	40	30	30

月でも、この品質を保っている例が多いことは云うまでもない。台湾産ポンカンは、2月には糖度は少し高まるが、酸の減少が大きいので、味が淡白すぎるきらいがある。

余談になるが、ポンカンの食べ方は、温州ミカンと少し違えた方がよさそうである。

ミカンみたいな皮のむき方をすると、ややむきにくく、皮の油で手をよごすこともあるので、まず、両手でポンカンのへソの所に親指のツメを少し立てる感じで2つに割り、中の袋を1つずつ取り出し、袋の外側についている白い糸みたいなもの(維管束)を少し取り除き、そのまま口にほおりこむと、ミカンと違ったポンカン独特の風味が楽しめるというものである。

4. ポンカンの施肥量

以前は温州ミカンに2割程度よけいに施肥していたが、ポンカンは栄養生長に走りがちなことや、品質向上の点等から、現在では温州ミカンと同じ施肥量で栽培されるようになった。

しかし、前記の枝を誘引する技術が取り入れられるようになり、これに対する施肥量は多く必要だとする意見と、同じでよいという意見があり、現在試験中で結論は出ていない。

第2表は県の施肥基準量であるが、10a収量3トンの粘土質土壌ではチッ素22kg、リン酸15kg、

第2表 ポンカンの施肥基準量 (10a当りkg)

土 壌	目標収量	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
粘 土 質	2トン	18	13	14
	3	22	15	18
	4	25	17	20
黒 ボ ク	2	15	14	12
	3	19	17	15
	4	22	19	18
砂レキ質	2	23	14	18
	3	27	16	22
	4	30	18	24

6. ポンカン肥料の種類

春肥と秋肥は、チッ素源は尿素、りん安を主体とし、油粕、骨粉、魚粕等の有機質を35~40%配合した複合肥料が大部分であり、一部ではCDU等の緩効性化成、有機入り化成等が使用される例もある。

夏肥はチッ素よりリン酸、カリのやや高めな化成肥料が使用され、燐硝安カリ S226が温州ミカンを含めて夏肥の大部分を占めている。

7. ポンカン肥料の問題点

前記のように、ポンカンは栄養のバランスを適正に保つのがむずかしく、品質の面からは、ポンカンにはスアガリ現象(糖、酸が少なくなり、果肉が硬くなる)が発生することがある。

これはチッ素の施肥量が多過ぎる場合や、結果量が少ないときに発生が多い傾向にあるが、対策が確立されていないことや、ポンカン地帯は花崗岩、頁岩、火山灰等、マンガン、アエン等が欠乏しやすい土壌であるため、これらの補給等の技術的問題と、果実の価格が下降線をたどりつつあるとき、割高な有機質肥料の効果と、肥料費低減との折合いを、どう解決するかが今後の大きな問題点であろう。